

「職業の道楽化」

明治神宮代々木の森や、伊勢神宮の御用林を創られた本多静六先生(1866～1952)は、日本の林学者の草分けであり本業の林学者としても著名な実績を遺されました。

そして個人的には、給料1/4貯蓄法で財を成され、晩年そのほとんどを寄附され、みごとな人生を送られた方として有名です。

その本多先生の人生訓の中で述べられておられるのは、「職業の道楽化」という事です。

本多先生は、

「万一、不慣れ不適當な仕事に当面することになっても、これを天職と確信し、これを命運と甘受し、迷わず、疑わず、最前を尽くして努力するならば、初めは多少の苦痛は伴っても、いつとはなしにその仕事に慣れ、自分もそれに適応する様になって能率も上がり成績もよくなり、自然とその仕事に興味も生じてくる。

そうしてついには、それが面白くてたまらなくなるころまで新局面が展開される。

そこまでくれば職業の道楽化が達せられる訳で、人と職業が一体化され、成功は必ず向こうからやってくる」と「人生計画の立て方」という著書で述べられておられます。

近年日本は、生活のスタイルも多様化し、自ずから仕事の仕方も多様化してきているのは、時代のトレンドとして否定するものでもありませんが、何の仕事でも好きになるまで努力すれば、自然と上手になれるのであって、努力無しにそれを得る事は有り得ないと思います。

雇用する側とされる側によって、考え方が異なるケースが有るのは事実だとは思いますが、私は職業を「道楽」とする迄やらない限り、どの分野でも一流、超一流という領域までは絶対到達出来ないと思っています。

今日の日本は世界で最も平和で豊かな国の1つである事は事実だとは思いますが、長い人生で、時代がいつも良いとは限りません。

時代に左右されない確固とした人生を送ってゆく為に、恵まれた現代に生きる我々は、本多先生の言われる仕事を道楽とする事の意味を、今一度考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

「若い時に流さなかった汗は

老いて後悔の涙となる」

という言葉もあります。

こうした考えを、時代に逆行する考えととらえるか否か、その答えは10年後、20年後、あるいはもっと後に出てくる事かと考えます。

ただ後になって後悔したとしても過ぎ去った時間は戻りません。

役所が人の働き方を決めるのではなく、勤労や努力の大切さを、人生経験豊かな人達から、若い世代へ伝えてゆく必要性を考える今日この頃です。

徳真会グループ
理事長 松村 博史



新潟市：いくとびあ食花